

前回は受賞者なしに終わったので、今回はいささか恐る恐る応募原稿に目を通すことになったが、これが打って変わって、力作とは言わないまでも、論じるに値する評論が少なくとも六篇以上はあってほっとした。私個人の評価としては、うち三篇に関してはどれが受賞しても良いと思う水準だった。

そこで思い返したのだが、前回の選評は、落胆のあまり音楽批評全般にわたってかなり辛辣なことを書いてしまったのではないかと、いまやいささか反省している。西洋クラシック音楽もサブカルのひとつとまで書いてしまったからである。むろん、サブカルで悪いことはない。だが、興行の桁が違うことは明記しておかなければならない。

私はチェリビダツケの登場でブルックナー評価が変わったと思っているが、その背後にチェリビダツケ独特の「音楽の現象学」が潜んでいることを疑わない。ただ、残された片言隻語から推測するかぎり、チェリビダツケは音の原理論にこだわりすぎていたのではないかと思う。私の考えではしかし、「音楽の現象学」がいま必要とされるのは、西洋クラシック音楽はどのようにして「音楽の内面空間」を発明したのかという、音楽史というよりは文化史に属する問いに答えるためなのである。

「音楽の現象学」に関して、私は、フッサールの弟子としてはインガルデンのほうがシュツツ以上に多くの手掛かりを残しているという印象を持っている。また、音楽の現象学がもっとも力を発揮するのは、コンサート・ホールにおいて以上に、劇場や映画においてであるという印象を持っている。

人間はおそらく歴史上のある瞬間、敷居を跨ぐようにして、宗教音楽、祝祭音楽の空間から「音楽の内面空間」へと一挙に入り込むことになったのである。それは西洋クラシック音楽の伝統においてもっとも顕著であって、このことにおいてだけでも西洋クラシック音楽の富は他を圧していると思う。これがあってはじめて、人間は個別的な人生に付随する喜怒哀楽の音楽を持つにいたったのだ、と思う。いや、人生という物語を実感的に享受するようになったとさえ言っている。そしておそらく、その土壌があってはじめて、舞踊と映画が芸術になりえたのだ。いわば、映画音楽があってはじめて映画が生まれたとでもいふべき逆説がここには潜んでいる。音楽の内面空間の発明なしに映画芸術は成立しえなかったのである。私はそう思っている。

「音楽の内面空間」とは自由の別名にほかならない。

応募原稿の少なからざる量が、今回のパンデミックに言及している。オーケストラもバレエ団もいまや壊滅的打撃を受けているのだ。だが、日本人の美德といふべきか、中国共産党に対する批判は控えられている。私は逆に中国共産党とマルクス主義に関してこそ、

その責任を鋭く追及すべきだと思っているが、それは、中国共産党が成立してこの七〇年、音楽の内面空間」などにはおよそ関心を払ってこなかったことに端的に示されていると思うからである。李白や杜甫で有名なこの国がかくも長く文学や芸術などいっさい生み出してこなかったことにもっと驚くべきなのだ。中国人民の人生、推して知るべしである。

音楽の内面空間」を発明した西洋クラシック音楽の伝統は、考えてみればしかし異様でさえある。インド音楽は深遠であるということになっているが、その内面性は、個別的な人生に付随するものではない。むしろそれを払拭すること、忘却することにおいて深遠たらんとしているのだ。ガムランの生み出す無限空間にしても同じことだ。対比すれば、西洋が発明した内面はいわば個別的なものであり、事実、自由は一人ひとりの次元において成立しなければ意味をなさないのである。

音楽の内面空間」へといたる歴史的瞬間は、たとえば、モーツァルトの交響曲第二十五番からベートーヴェンの交響曲第五番への展開というかたちで象徴的に示されていると考えることができる。感動は、人それぞれの個人史の次元において成立するのであり、その個別的な感動の共通性——あなたも——が人を驚かせ、人を結びつけるのである。

受賞した相馬巧の『ドン・ジヨヴァンニ、婚約をめぐるドラマ』が浮き彫りにするのも、これと違った問題ではない。『ドン・ジヨヴァンニ』の「地獄落ち」の音楽から「六重唱」へといたるフィナーレは「音楽の内面空間」が発明される過程をそのまま作品化したようなものだからである。いわば二つの時代が位相を変えてさまさまなかたちで対峙しているのである。キルケゴールがその問題を浮き彫りにできたのは、音楽が内面空間を獲得したその歴史的瞬間に、自身、立ち会っていたからにほかならない。解釈が分かれるのは「音楽の内面空間」が——舞台や映画で通俗化するほどには——なお安定してはいなかったからである。アドルノが指摘するのは、内面空間を経たうえでの共同性こそ、全体主義の起源にほかならないということであり、それこそ近代民族主義そのものだということだ。それがモーツァルトからヴァグナーへといたる過程だということである。民族の一体感は、「音楽の内面空間」が共有されたときにいつそう深まるのである。

ここに音楽の甘美なまでの魅惑の核心がある。ロマン主義の諸刃の剣としてこれまで一貫して問題にされてきたことである。奨励賞を受けた布施砂丘彦「音楽の態度」もまた、パンデミックを論じながら、いわば矛盾のかたまりとしての音楽の魅力、音楽の魔力に注意を促している。紙幅を考えれば、引用文献、言及文献が多すぎる気がしないでもないが、問題の核心をはずしてはいない。文献ということでは、逆に、相馬巧はその主題からいっても岡田暁雄の『恋愛哲学者モーツァルト』に言及して良かったのではないかという気がする。基本的には同じ問題を扱っているからだ。

個人的には、西澤忠志「新型コロナウイルス流行時の祝祭——ヴァーチャル空間の演奏共同体への試論」がその着眼において、川上啓太郎「象牙の塔の作曲家への頌歌——シャルル・ケクラン没後七〇周年に寄せて」がその対象において、興味深かった。相馬巧が受賞したのは、切り込み方の鋭さが他に一歩抜きんでいたからだと思う。